

《これまでの『ブルーアイズヒーロー』》

【登場人物】

・ロバート・クロス

主人公。貧民街の出身だったが、自身の美貌を使い売春で次第にのし上がって行く。

・イーサン・カーター

ロバートに育てられた少年。運動神経がよく射撃と手芸が得意。暗殺業を始める。勉強はすこぶる苦手。

・アン

ロバートが恋する女性。ブラフマー街の貧しい娼婦。

・ウイリアム・スカダー

シヴァ街の四番目のマフィアのボス。病身の妻を深く愛する。ロバートを嫌っている。

【重要用語】

・シヴァ街

ネオンライトタウンの三つの区分の内、最も豊かな街。現在、ロバートとイーサンが暮らす。

・ヴィシユヌ街

三区分の内の真ん中。中間階級の人々の住む街。

・ブラフマー街

ネオンライトタウンの最底辺に位置するスラム街。ロバート、イーサンの出身地。

・ヴァルナ社

ネオンライトタウンで最も力のある会社。マフィアと癒着があり、悪い評判が絶えない。

【前回のあらすじ】

ロバートが過去を語り続ける。幼いころ母を亡くしたロバートは、路上で孤独に暮らしていたが、ある日赤ん坊のイーサンを拾い育てることになる。盗みや物乞いで必死にイーサンを育て、ロバートは十一歳にまで成長する。その頃、彼は皮膚病にかかり体中を傷だらけにしてしまう。そんな彼を助けたのは、ブラフマー街の貧しい娼婦の少女だった。彼女はロバートを綺麗に洗い上げ、傷に薬を塗る。ロバートは自分に親切にしてくれた少女に恋心を抱き、彼女に心の中で「アン」という名前をつけて、生涯の恋の相手とする。一方、アンに洗われたおかげでロバートは自分が美しい容姿を持っていることに気づく。彼はその美貌を使って売春を始め、今まで以上に稼ぐようになる。社会的なステータスを手に入れたロバートは、段々最高の街であるシヴァ街に憧れを持つようになる。ある

夜、売春中に襲われたロバートを助けるべく、イーサンが客を射殺するという事件が起きる。その事件を聞きつけたシヴァ街のマフィアにイーサンが専属暗殺者のスカウトを受けるが、ロバートは迷う。しかしイーサンはシヴァ街の居住権を条件にスカウトを受け、二人はとうとうシヴァ街に移り住む。

シヴァ街で暮らす内、ロバートはアンと再会を果たす。最高のステータスを手に入れた自分を彼女は誇りに思ってくれるだろう、とロバートは思いこむが予想に反してアンは身を汚してしまったロバートに失望して泣き叫ぶ。その様子に混乱するロバートだったが、その夜初めて体を売ることに嫌悪を覚える。しかしロバートは、誰にも同情されることのない人間になりたい、と強く思うようになり、ネオンライタウンのトップ、ヴァルナ社を目指す覚悟を固める。

作…こだま

挿絵…市川司幸

「一か月が経った。高い物、美しい物にも慣れた頃だった。私は相変わらず皿洗いでイーサンは名うてのアサシンだった。昼下がりに、よく訓練終わりのイーサンがTシャツ姿で水を飲む横で、昼食の後片づけをしていた。このところイーサンは私を何も言わずにじっと見つめるようになった。私が食器を乱暴に扱うようになったことにも気づいているようだった。」

「何？」

「と、私は洗った皿を洗い籠に音高く置きながらイーサンを見た。彼はさっと目を反らしてコップに集中したが、やがて決心したように言った。」

「ジュース飲んでいい？」

私は黙って戸棚からオレンジジュースの瓶を取り出し、イーサンのコップに注いでやった。イーサンはちびちびと二、三回口にしたが、それでも私を見る目は変えなかった。

「大丈夫？」

「と、彼は掠れた声で言った。」

「大丈夫って何？ 何が？」

「いや、なんかさ……」

私の声にイーサンは遠慮がちに答えていた。しかし、答えを言わないまま彼はジュースを飲み干し、Tシャツの上にカッターシャツを素早く着た。

「愛してるよ」

そんな声がイーサンの足音と共にうっすら聞こえた気がした。

あの夜から、私はすっかり短気になっていた。始終イライラして、誰に対しても平気で口答えをし、仕事もいい加減になった。あの誓った思いがまだ胸の中に燻っていた。ブラフマー街のアン、シヴァ街のヴァルナ社が両側から私の胸を引き裂いているかのようだった。それなのに、ヴァルナ社への階段は一向に見つけられなかった。時々、イライラして皿を欠けさせる私をスカダー氏は相変わらず叱った。ちくちくと嫌味を言い、頭を引っ叩いた。それなのに、売春の話だけは一度も持ち出さなかった。あの日の夜のことも話題には出さなかつ

った。そんなスカダー氏の態度さえも、私の焦燥感にむらむらと火をつけていた。

ところが。

まあ、チャンスというのは焦らして焦らしてやっと神様がくれるものなのか、ひどく長い時間が経った頃、私の願いはやっとやっとのことで聞き届けられ、とうとうチャンスは到来したのだ。

ある日の午後、アジトに届いた手紙の仕分けをする雑用をしていると、スカダー氏に当たったある封書が目にとまった。カルタ会か何かの招待状であるらしく、他の封書と比べて紙も蝉もつやつやとした高級品だ。何気なしにシーリングを眺めると、赤い蠟の上には二つの矢印が互いの尻を追いかけているマークが押されていた。

(あ……もしかして……)

そう思って封書を裏返すと、裏側には「アーノルド・リズリー」という差出人の名前があった。目論見通り。ヴァルナ社の先代の社長である。

私はぞくりと肌が粟立つのを感じた。

チクシヨウ。何で思いつかなかったんだ。スカダーがリズリー社長と知り合ってたって不思議じゃないじゃないか。それにしてもいい事を知った。スカダーを通してリズリー社長と知り合うことができるぞ。

私は震える息を吸って胸をなでおろした。しかし、嬉しい気持ちにはなれなかった。でもそんなことできるだろうか。

と、汗ばむ額の奥で思った。

何となく、スカダー氏は私がリズリー氏と知り合うのを嫌がるのではないか、という気がした。「リズリー氏に会わせてください」とお願いしても、とても聞き入れてくれないのでは、と。そして私がヴァルナ社と関わりを持つとうとするのをことごとく邪魔するだろう、と。

せっかくのチャンスの前に、もんもんとして一晩中寝室で考え込む私を、イーサンは不安そうに見つめていた。やがて彼は備え付けのキッチンから甘い温かいチョコレートを持ってきてくれた。「元氣出せよ」

とにっこり笑うイーサンの隣で生姜入りのチョコレートを飲むと、鼻の奥がつんとして少し涙を誘った。その時、なぜかイーサンではなくスカダー氏の面影が頭にちらついた。

さて、そうこうせっかくのチャンスの前で地団駄を踏んでいると、第二のチャンスが私の両手に乗った。

スカダー氏の永遠の妻、エリノア・スカダー夫人の病が治るめどがたったのだ。フイラデルフィアのペンシルベニア大学に、かなり名の通ったドイツ人の外科医が来ているという情報を得たスカダー氏は、その外科医なら妻を治せるかもしれない、と大喜びした。

ところが。その外科医というのがドイツ皇室御用達の医者で、治療費が馬鹿に高いと分かると、スカダー氏は気の毒なほど落胆した。スカダー一派は金貸しの利子や麻薬の売買で儲けていたのだが、近頃収穫が芳しくなく何より部下への賃金を少しも

惜しまなかつたため、スカダー氏の銀行の口座は氷河期状態だったのだ。

仲間達は何とかスカダー夫人を救おうと給料をすり切らして資金を出し合つたが、それでも予定額の四分の一にしかならなかつた。ため息交じりに交わされる話を聞いて、私は身震いした。

「さあ、もう後には引けない。
俺をリズリー氏に売ってください」

夫人の寝室で、私はスカダー氏にそう言つた。スカダー氏は妻の傍らに腰かけたまま、私を睨みつけた。

「売ってどうしろというのだ」
「奥様の役に立ててください」

私は事前に組み立てて置いた台詞をどおりながら喋つた。スカダー氏の厳しい目の中ではそうせざるを得なかつた。

「ミスター・リズリーは旦那様と違って、好色家だつて聞きました。若い男の子も好きだつて……。あの、だから俺だつたら気に入ってもらえるかなつて思つたんです。それで、俺の代金として奥様をお医者に見せるお金を代わりに払つてもらつたらど

うかなつて。ヴァルナ社の社長なら、多分高いお金でも用意できるし……。あの、いいと思いませんか？」

スカダー氏の眉根がぎゅつと寄り、妻の手に重ねられた右手が小刻みに震えた。彼はしばらく黙り込んだ後、泣きそうな声で言つた。

「できるわけがない……。無理だ。お前にはできない」

「できませんよ、ロバート」
夫人の声が重なつた。彼女は夫よりも雄々しく私を見ていた。

「私はできません。自分が助かるためにまだ十七歳の男の子を売るなんて。私はね、夫と共に随分汚いこともやってきたけど、お前のような小さな子供にまで同じことをさせようとは思いません。そんな恥知らずなこと、決してできません」

「できますよ！」
「気づけば私は叫んでいた。叫ぶというアクションは、台本にはなかつたが。

「できますよ、俺きつとできます！ 信じればできないことなんてないです

よ！

大丈夫です！ 絶対やれます！ やらせてください！ 俺、奥様に助かつて欲しいだけなんです！」

椅子が床へ倒れる乾いた音と共に、スカダー氏が立ち上がった。

「本当か、ロバート。本当にエリノアのために金を作ってくれるか？」

「はい、やれます！」
次は厳しい声で言つた。

「でも、イーサンは俺が連れて行きます。あの子だけは何かあつても手放しません」

「ああ、もちろんだ！」
スカダー氏が駆け寄り、私の足元に這いつくばつた。彼の深く皺の刻まれた顔に涙が幾筋も流れて行つた。

「分かつた、ロバート！ なんでも言う事を聞こう！ だからどうかエリノアを助けてくれ！ あの人が助かるなら、私はなんだつてする！」

今までさんざ私を見下し、罵つて来たスカダー氏が、私の足元で小さく萎んでいた。バカにされてきた相手を見下す絶好のチ

ヤンスであつたが、泣き叫ぶスカダー氏にひどいことを言う気には何故だかなれなくて、私は夫人の方を見た。

「大丈夫ですよ、奥様。自分がやりたくてやることですから」

スカダー夫人がわつと泣き出した。

演技で乗り切るつもりだった。でもあの頃は嘘が下手だった。

三日後、スカダー氏が茶会を一席設けてくれた。私はドアの隙間から、居間に座るリズリー氏を見た。スカダー氏と同年代であるのか、外見はあまり彼と変わらなかつた。しかし、一目で「ヴァルナ社の社長」という肩書きが見えた。

二人の話が弾み、やがて緩められたところで、私は珍しい緑の茶を不思議な形のポットに入れて盆にのせ、居間に入った。リズリー氏の前にお茶を注ぐ時、わざと茶碗を指で突き倒した。お茶が小卓から床へと零れ落ち、私は「ああ！ ごめんなさい！」と叫び、手巾を持ってリズリー氏の両足の

間に頭を差し込み、床を拭いた。リズリー氏の視線が私の白い項にじつとりと注がれていた。頭を傾けてみると、スカダー氏の不安そうな顔が見えた。

(大丈夫ですよ)

そう伝えたくてにっこりと笑った。

その茶会の終わりに、私は帰りがけのリズリー氏も呼び止められ、名前を尋ねられた。スカダー氏は歓喜を顔に浮かべてリズリー氏をもう一度座らせた。

「どうか、その美しい少年を私の元へ。金はいくらでも出そう。他に条件があるなら何でも呑む」

そうリズリー氏は言った。スカダー氏は二つ返事で頷いた。契約書にサインを済ませたリズリー氏を見送ると、私は安堵のため息を漏らすスカダー氏と居間に二人きりになった。

「スカダーさん」

私は今までずっと聞きたかったことをようやく口にした。

「俺のこと、嫌いだったんですか？」

スカダー氏は泣いていた。安堵の奥に、

悲しみは浮いていた。

「子供が欲しかった。何十年もそう思っていた。子供がいればどんなに幸せだろうか。でも、ようやく分かった。私は親にはなれない」

どんな意味かは分からなかった。でもそれを聞いて、今まで心の端にも表れなかった、自分の父親のことを考えてしまった。名前も顔も知らない、私の父のことを。

少し先のことを話しておこうか。私がリズリー氏に買われて一年ほど経った頃、手紙が一通届いた。スカダー氏からだった。夫人の手術が成功したこと、組織を解体したこと、今はカリフォルニアに移って、妻と組織の元メンバー達とオレンジの農園を営んでいること、そんなことが書かれていた。

今でも夏が深まると、スカダー夫妻は籠いっぱいオレンジを送ってくれる。砂糖と煮詰めてジャムにするのは毎年私の仕事だった。煮詰めると爽やかな香りがたち

まち私を覆う。「帰っておいで」と呼ぶよ
うな、甘い果実の匂い。

さて、時間を巻き戻してリズリー氏に買
われたところから話そうか。

ヴァルナ社に移ることになった話を恐
る恐るイーサンにすると、案の定イーサン
は怒り狂った。

「勝手なこと言うなよ！　なんで急にそ
んなこと決めるの!?　一言相談してくれ
てもよかったのに!」

「うう、ごめん……。」

これに関しては完全に自分の落ち度で
ある。平謝りするしかなかったが、だから
と言って意志を曲げる訳にも行かなかっ
た。

「だって大層な博打だったから俺も余裕
なくて……。でもさ、ヴァルナ社に行けば
もっといい生活ができるぜ?　ここより
豪華な所に住むんだからさ」

「俺はもう十分だよ!　もういいよ、これ
以上何もしないでよ!」

イーサンが激昂した。そのまだ変声期に
差し掛かったばかりの高い声に、私は突然
冷静さを失った。

「俺は全然だよ!」

そう怒鳴り返した。するとイーサンが驚
いたのか、するどく息を吸い込んだ。

「お前はいいよな、ここでもたくさん仕事
貰えるんだからさ!　でも俺は違う!
こんな所じゃ全然まだまだなんだよ!
何にも知らねえくせにでかい口叩くんじ
ゃねえよ!　あっそ、そんなに嫌ならいい
よ、来なくて。ずっとここにいたら!?　そ
の代わり俺はもうお別れだから。じゃあ
ね、バイバイ!」

この大喧嘩を解決させることなく、私達
は無言でベッドにもぐりこんだ。

言い過ぎた。

親指の爪を噛みながら、ぐるぐると頭の
中で反芻した。

絶対言い過ぎた。

あの言葉を、イーサンが鵜呑みにしてし
まったらどうしよう。そう思うと震えが止
まらなかつた。こんな形であの子と永遠に

離れ離れになるのが怖かつた。

しばらくすると、イーサンが自分のベッ
ドに潜り込んできた。腕が腋下を通り、私
の胸を掴んだ。

「一緒に行く」

背中が湿った。

「やっぱり一緒に行く」

安堵がどっと押し寄せた。私は体を返す
と、イーサンの額にキスをして眠った。

初めて入るヴァルナのビルは、前に見た
時よりも低く思えた。そう感じたのはビル
の前で車を降りた時だった。しばらくして
ビルが低くなったのではなく、自分の背が
伸びたのだと気が付いた。

あの重厚で無機質な外面とは違い、ビル
の中はロシアの冬宮のように煌びやかだ
った。赤じゅうたんを敷き詰めた玄関ホー
ル。その両側には白大理石の大階段が上へ
ぐるりと伸びていて、さらにその上の吹き
抜けの天井へ、ガラスケースのような透明
なエレベーターが上へ下へと動いていた。

エレベーターの楽しかったことと言ったら！ スカダー氏のアジトにもエレベーターはあったが、専ら機材を運ぶためのもので、ひどく無機質で動く度にガタガタ言った。しかし、やはりシヴァの最高峰のエレベーターはさすがで、動いているものも分らないくらいすうっと静かだった。

私とイーサン部屋の部屋は残念なことに分かれてしまった。しかし、スカダー氏の時と違い夜の仕事も多くなるので、妥当と言えは妥当だった。

私に与えられた個室は、深い青に金のアラベスク模様の壁紙がある、情緒的で美しい物だった。寝台の脇のサイドテーブルに、伽羅の香りのする蒸気を放つ小さな箱があった。香には全く詳しくなかったが、何に使う物かはすぐに分かった。

荷ほどきをしてほっとしていたのも束の間、次は黒いドレスに白いエプロンを着けた美人なメイド達を大勢従えた、大柄な男が部屋にずかずかと入り込んできた。

「お前がロバート・クロスか？」

男は横柄な態度で私を見下ろした。

「そうですけど。あの、何の御用ですか？」
「ふーん」

男はじろじろと悪びれもせず私を舐めるように眺め、そして仏頂面で言った。

「私はジェフリー・ポールドウィン。社長の側近をしているものだ。よく覚えておくように」

「すみません、多分忘れます……」

「なら今から記憶に焼き付けてもらおう」

「はい？」

私は恐る恐る彼の背後のメイド達を見た。彼女達は美しい笑みを浮かべながら、痛そうなブラシやら目の粗そうな櫛やらを取り出していく。

「まずは、その田舎者丸出しの出で立ちを何とかしてもらおう」

ジェフリーの一言で、メイド達がどつと私に押し寄せた。そしてあれよあれよという間に服を脱がされ、風呂に引きずり込まれた。

「いやああああ！ 自分でやるから勘弁してええええ！」

と、命からがら叫んだが、石鹸は口に入

るわ、肌が擦り剥けるほど擦られるわで、私の叫びなど小鳥のさえずりほどの音量が精いっぱいだった。

「どうだ、私の名前はもう覚えたか？」

「ジェフリー・ポールドウィンさんです！ ジェフリー・ポールドウィンさんです！ ジェフリー・ポールドウィンさんです！」

もみくちゃにされている私を愉快そうに眺めるジェフリーに、私は八つ当たりも込めて怒鳴った。恐らくヴァルナに来て、リズリー氏の本名よりも先に覚えた名前だった。やれやれ。

「ただ、拷問……入浴が終わり、清潔な肌に初めてイタリア産のスーツを着ると、一時ジェフリーのことは頭から消えた。悪魔のごとき冷酷なメイドがうつとりとした顔をしているのが、鏡に映った。」

「様になったな」
ジェフリーが満足そうな笑みを浮かべた。私も、今まで見たことのない新しい美しさを身に着けた自分に満足した。

「旦那様は夜の十二時過ぎにいらっしや

る」
ジェフェリーが静かに言った。愉快そうに私を見下ろしていた時とは別人のような声だった。

「心しておくように」

リズリー氏が来るまで、私の心臓は早鐘のように波打った。夢と希望、そしてスカダー夫人の命がかかった体を抱きしめ続けた。

彼がやがてやって来た。どう出迎えたらいいのか分からず、「どうも」と馬鹿みたいに言っただけでぼさっとベッドに座り込んだ。

「香を炊け」

そう、リズリー氏は静かに命じた。

「あの……」

「なんだ」

「やり方が分かりません」

我ながら本当に間抜けだと思う。嘘が吐けないから馬鹿なのか、馬鹿だから嘘が吐けないのかわからないが。

リズリー氏は私を無視した。手早く服を脱がせ、手早く事を済ませた。私は疲れ切つて寝台で船を漕いだが、やがてぐちゃぐちゃに脱ぎ捨てられたスーツを思い出し跳ね起きた。

「何をやっている」

リズリー氏は、ご丁寧にスーツの皺を伸ばしてハンガーにかけている私に怪訝そうに問いかけた。

「だって皺になります。高い物だし……」

「皺になどならん」

リズリー氏はつまらなさそうに軒をかき始めた。私の耳にいつぞや拳骨とともに食らったスカダー氏の怒鳴り声が蘇った。

「この馬鹿者！ 服は脱いだらすぐにハンガーにかけんか！ 皺になったらどうする！」

さあ、こうしてヴァルナ社での生活が始まった。

始終気難しい顔をしているリズリー氏であったが、彼は彼なりに私を気に入って

はいたようだった。何しろ若さや美しさだけでなく、イーサン・カーターという凄腕の暗殺者まで提供してくれるのだから。彼の満足は財布のひもに出たようで、スカダー夫人は無事に十分な医療費を得ることができた。

これまた幸いなことに、イーサンはヴァルナ社でも大層大切に扱われた。同輩にも先輩にも好かれ、夜には度々活躍した。女中達とも仲が良く、訓練を終えた午後には、よく彼女達とお茶を飲みながら縫い物をしていた。

一方。私はスカダー氏の時のように、家事に明け暮れることはなくなった。苛性ソーダ石鹼で手を荒らしていた日が嘘のように、私は着飾らされてリズリー氏にどこへなりと連れまわされた。

客に招かれても招いても、彼はいつも私を隣に立たせ、人形のように慎ましく美しい顔を自慢した。客人達は好色な笑みを浮かべて私の腿や尻を触り、私は招かれるたびに目にする豪華な客間にぼうっと見られた。

昔の物語を糸で伝える壁掛け、朝の空のように薄いブルーの陶器、びっしり彫刻の入った小箱、薄い絵の具でアジアの絵が描かれた不思議な折り目のついた衝立。手が服の下に入ってくるのを忘れるくらい美しかった。

初めて連れて行ってもらった夜会は楽しかった。私は特別に逃してもらったホーランドアンドシェリーの夜会服を着て、真っ白な蝶ネクタイを締めて。髪も油でなでつけて、本当に貴族の令息と見間違えうかようだった。パーティーホールの壁はどこもかしこも金が塗られていて、大きな円天井にはアルプスを戦象部隊で超えるハンニバルの雄姿が描かれていて、それをコリント式の滑らかな白い柱が支えていた。幾何模様の大理石の床に、私の踵の高い靴が音高く打ち付けられると、周りの人々はみんな私にくぎ付けになった。誰もが私の名前を聞きたがった。誰もが手に接吻を求めた。初めて飲んだシャンパンに味付けされた甘い私の唇が、手から手へと飛び回った。太陽は宝石が返す光だった。風ははた

めくドレスの裾だった。大地は毛皮か大理石だった。水は香水だった。知らなかった世界があった。今まで私が出会ってきた人も知らなかった世界が。だけどそこに私の言葉はなかった。出かけるとき、人に会うとき、リズリー氏は必ずこういうのだった。「余計なことをしゃべるなよ、ロバート。お前は黙って微笑んでいるだけでいい」

私が初めてグレース・マクファアレンと出会ったのも、あの頃だった。私が後悔に後悔を重ねた、あの美しい思ひ出の女性だ。ある日、リズリー氏に相談を持ち掛けられた。

「このネオンライトタウンにマクファアレンという男がいてな」
彼は気怠そうに煙草を吸った。正直にお願いが移るのでやめてほしかったが何も言えなかった。

「高貴な家柄の金持ち男だな。広大な土地を所有しているのだが、私は何年もその土地を狙っている。そこを買い取って工場を

建てたいのだが、いくら条件のいい取引を持ち掛けても、あの男、全く首を縦に振らん。頭の固い正義漢で、私のような汚い成り上がりを軽蔑しているようだ。しかし、ロバート。お前のように若く美しい少年を取引に出せば、相手も意見を変えるかもしれない。役に立ってくれるな？」

私は二つ返事で了承した。
「うん、よし。何度も言うが、余計なことを喋るんじゃないぞ。黙って微笑んでいるよ」

お決まりの文句を、彼は忘れなかった。
マクファアレン氏からは今まで嗅いだことのない匂いがした。あの煌びやかなパーティーの中でも、感じ取れなかった匂い。それは貴族のものだった。何百年も守り、誇った青い血の匂い。

彼は貴族に似つかわしくない質素な部屋で、リズリー氏の話聞いた。着ているものも、私やリズリー氏の服に比べてずっと安上がりだった。しかし、その安上がり

な服がひどく高貴に見えた。顔つきもまた貴族のものだった。静かで品よく、優し気な顔。しかしその顔は、リズリー氏が売買の交渉の結論に差し掛かり、私の肩をぐいっと前に押し出したところで豹変した。

「いい加減にしたまえ！」

と、彼は立ち上がって怒鳴った。

「君達は私の父祖から受け継いだ土地を、さんざん踏み荒らすだけでは飽き足らず、その最後の一片までもぎ取ろうというのか！ しかもその代償に少年を買えというのか！ 馬鹿にするのも大概にしたまえ！ 私は君達のように金や色では動かん！ わかったらさっさと帰ってくれ！」

大きな声で怒鳴りつけられ、私は体を強張らせた。しかし、リズリー氏は少しがっかりした顔を見せるだけで涼し気に肩を竦めた。やっぱりだめか、と言いつつに。

グレースが私の前に初めて現れたのは、その直後だった。

仕方がない、帰ろうとリズリー氏が言い、よっこらしょと椅子から立ち上がったそ

の時、居間の扉が勢いよく開き、何か白い物が駆け込んできた。

白い物は一人の少女だった。白い肌に着ているドレスも白い。背に垂らした髪だけが紅茶色だった。

少女はマクフアーレン氏の元へ駆け寄り、その手を取って「お父様、大丈夫?!」と叫んだ。「おお、グレース」と、マクフアーレン氏が優しく少女の髪を撫でた。

「またあなたなのね、卑怯者！」

やがて少女が怒りの声と共にこちらを向いた。私は心底から驚いて目を見開いた。その少女の、あまりの美しさに。白いドレス、白い肌の中に、深い色の瞳が怒りに燃えていた。私達に向けられた、その怒りさえ美しかった。まっすぐでひたむきで、どう頑張ったって私には真似できない気高い美しさ。彼女の白さの秘密がそのままに現れていた。その美しさが、私にこう言っているように感じた。

「何をにやにや笑っているのよ！ まるで物言わぬ案山子みたいに！」

帰りの車で、私はリズリー氏にグレース

のことを話した。

「きれいな女の子でしたね」

「まあな。マクフアーレン家は美形で有名なから」

リズリー氏は面倒くさそうに答えた。

「だがいくら美しくともあの娘は好かん。余計な思想ばかり詰め込んで、すっかり跳ねっかえりになりおった」

「でも、やっぱりすごく奇麗でしたよ、あの子」

「なんだ、まさか惚れたんじゃないだろうな」

「それはいいです！ 絶対に！」

私は大急ぎで否定した。私にはアンがいる。グレースに恋など冗談じゃない。

しかし、夜を越しても私はグレースを忘れられなかった。彼女の美しさがまだ頭に残っていた。

グレースと出会ってから、私は日々の贅沢が霞んで見えるようになった。

「何も言うな。ただ笑っている」

そういうリズリー氏に眉を顰めるようになった。あのうら若い少女が平気で声を荒げたのに、私はなぜ馬鹿みたいに黙っているのだろうか、と。ここまで来たのは人形になるためではない。あまりに煌びやかな日々の中で忘れていた昔の熱い思いが再び蘇った。俺はここで何をしている？ 案子みために突っ立って、それで満足か？ お前は何になりに来たんだ？ 権力者の愛人か？ いいや、唯一無二の頂点だろう！

だけど、すぐに声を出すのは難しかった。笑っていないで喋りたかったが、周りのお偉方やグレースのように、滑らかな発音がどうしてもできなかった。彼らが話す内容も、ちっとも理解できなかった。

だから、教えてもらうことにした。そのために頼ったのは、あの私をバスタブで痛めつけたジェフェリー・ポールドウインだった。

「勉強、教えてください」
私は書斎から持ってきた本を抱えて、子犬のような瞳で彼に訴えた。

「必要ないだろう」

ジェフェリーは気だるげに答えた。

「お前はただ寝ることだけを考えろ」

「それじゃ嫌なんです」

ジェフェリーが端からやる気がないわけではない、と私は不思議とそう思った。この人なら、きつと話を聞いてくれるはずだ。理解されなくても途中で遮ることはないはずだ。

「俺、いろんなものになりたいんです。一つのことだけじゃなくて、他のものになりたいんです。そのために勉強したいんです。知恵があれば、何にだってなれるから」

「生きるべきか、死ぬべきか」

「え？ 何ですか？」

「続けて言ってみる。生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ。どちらが気高い心にもこそ相応しい。この無慈悲な運命の中じつと耐え忍ぶ生き方か、怒濤の苦難に反旗を返し、戦い抜いて死ぬべきか」

「生きるべきか……死ぬべきか……。あの、これなんですか？」

「ハムレットだ」

ジェフェリーの瞳に心地よさげな光が宿っていた。

「そのひどい発音じゃ、シェイクスピアが嘆くだろうな。ロバート、一か月で完璧に言えるようにしろ。ハムレットの中身も完璧に覚えろ。あの堅物の人使いの粗い耄碌爺をぎゃふんと言わせたいんだらう？ 手伝ってやる。俺におもしろいシヨを提供してもらおうじゃないか」

夜が来るとリズリー氏の相手を務める。それが終わると書斎にすっ飛んで行って、夜が明けるまで勉強する。あまりにしょっちゅう鍵を借りに来るもんだから、管理人が愛想を尽かして書斎は毎日開錠されたままになった。

夜の子習復習が終わったことを確認すると、ジェフェリーは昼の隙間を縫って私を教えた。彼は相当に頭のいい男だった。本道楽だったという三代前のヴァルナ社長が築いた広大な書斎と同じくらいの知識を、彼はその頭に収めていた。その知識

が、どんどん自分の頭に移されていくのが楽しかった。シエイクスピアをおもしろいと思えた。商学も経済学も数学も、モーパッサンもボードレールも孔子もおもしろかった。あの豪華な客間で見た不思議な衝立が、「屏風」という名前であることを初めて知った。あの壁掛けに織られていた物語が、『ピラマスとシスビー』という悲しい恋物語であることを初めて知った。アンに恋した夏の日、春本の影にあったあの本が『エヴゲーニー・オネーギン』であったことを初めて知った。

知れば知るほど満足だった。だけどその分お腹も空いた。ぶっ続けの勉強で疲れ切った私を支えたのは、メイドのミリーだった。彼女は勝気で姉御肌の、気の回る娘で、私やイーサンを実の弟のように思い、何くれと世話を焼いてくれた。リズリー氏の相手や勉強で夕食をくいっぱぐれた深夜も、文句も言わずスープを温めてくれた。そしてジェフェリーの他に、彼女もまた私の先生だった。花嫁修業に邁進していたミリーは、丁寧な言葉遣いや発音、立ち居振る舞

い、テーブルマナー、ダンスを教えてください。彼女の生徒には、イーサンも加わり二人一緒に何度も「御機嫌よう」「恐れ入ります」「何卒よろしくお願い致します」と唱えた。

ジェフェリーとミリーのおかげで、次第に私は夜会で黙らなくなった。

「お招き恐れ入ります」と完璧に言えた日。あのリズリー氏の間抜け面が痛快だった。無論、リズリー氏は私の進歩に難色を示したが。

「最近のお前ときたらすっかり生意気になりおって！」

美しい言葉で最初の反撃を試みた夜、私はリズリー氏の仕事部屋でこてんこてんに叱られた。

「何だ、あの夜会での態度は、べらべら余計な事を喋ってみつともない！ 何か余計な知識をつけたんだな、ええ！ 言ってみろ、この余計もの！ 何を読んでそんな馬鹿らしい頭になったんだ、何を読んで！」

「言葉、言葉、言葉です」

そう答えると、背後に控えていたジェフ

エリーが嘖き出すのが分かった。

外面だけでなく中身も、私は本物の貴族に近づいていった。グレースのような気高さにはまだ程遠かったが、それでも一歩前進したのは間違いなかった。

そんな風に、十七の頃から着々トップへ上り詰める下準備を進めて二年が経った。私は十九、イーサンは十三になった。私の顔立ちから次第に華やかさが薄まり、色が表れ始めた。イーサンの子供らしくかわい顔も、段々少年のものとして引き締まっていた。

そのころあたりだったろうか。私とイーサンに三人の友達ができた。知り合いといえど数々いるが、友達、それもミリーのように姉のような女友達ではなく気の置けない同姓の友達、彼らが最初で最後だった。彼らに初めて会ったのは、ヴィシユヌ街の公園の、アイスクリームスタンドの前だった。散歩に出かけ、そこでイーサンにアイスを買ってやろうと財布を開き、そし

て手から滑らせ盛大に小銭をぶちまけてしまった所を助けてくれたのが彼らだった。地面に膝をつき、笑いながらお金を拾ってくれた三人に、アンやイーサンや母に抱いたものとは違う爽やかな思いを感じた。この出来事から私達はすっかり仲良くなり、私とイーサンは三人の友達を一遍に手に入れた。

あの三人のうち、一番知的だったのはパトリック・オーウェル。彼はシカゴの神学校の生徒で私と同じ年だった。知り合った時は夏休みの帰省の最中で、ここぞとばかりにやんちゃの限りを尽くしていた。とは言え物腰柔らかで頭のいい彼は、ヴィシユヌ街に一つだけある教会の牧師の一人息子で、将来はそこを継ぐことが決まっていた。

一番陽気だったのが、ジョン・ヘイスティングス。二つ年下の彼はいささか乱暴な面もあるが、さっぱりとした気持ちのいい性格だった。ヴィシユヌ街の高校に通いながら、製酒工場でアルバイトをしていた。

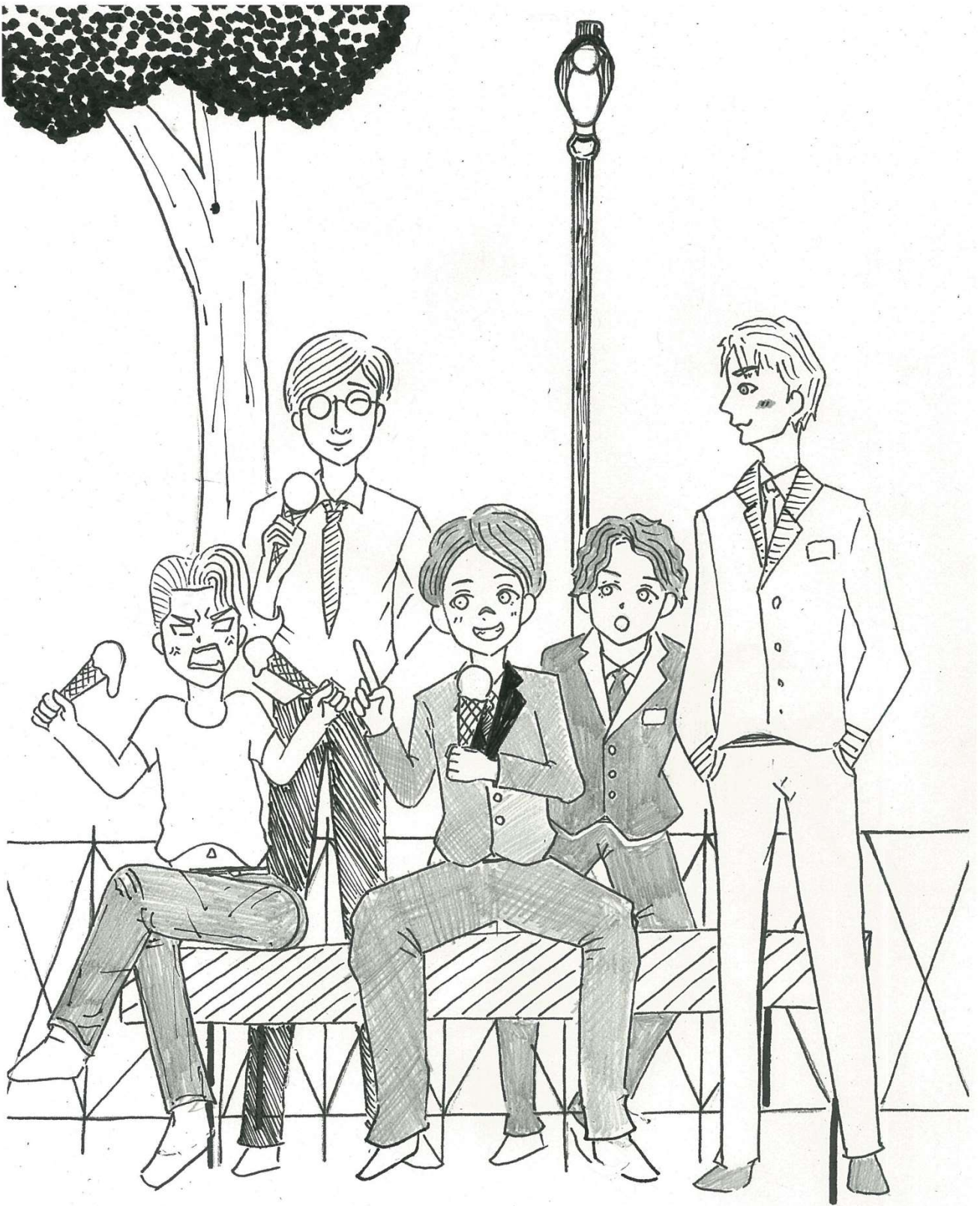
そしてアレック・バルダーソン。中産階

級の息子でジョンと同じ公立校に通い、その傍ら新聞売りのバイトをしていた。肌も髪も太陽の色に染まり、幼いながらも整った顔。そして何より笑顔が素晴らしかった。明るく、無邪気でロマンチスト。少し詩人の気質があつて、光と喜びと笑いしか知らずに育ってきたような少年だった。

パトリック、ジョン、アレック、イーサン、私。休みの日には五人で映画を見に行ったり、夏祭りで射的をしたり、公園のベンチでひそひそ下品な話をした。正直言つて、私からしたらなんて事のないレベルの猥談だったが、それでも迷わず「きつしよ！」と当たり前前に反応をした。彼らは私やイーサンの立場をよく分かつていた。分かっているながらも、何てことない下ネタ話を吹っ掛けた。その気遣いが嬉しかった。

「別に気にしなくていいんじゃないね？」

それでも時々登ってくる不安の端っこを見せると、彼らはいつもそういった。「心根が真っ直ぐならいいんだよ。問題は何をするかよりもどう思うかなんだからさ！」



私は心底から彼らが好きだった。こんな風にも含めずただ本当に好きだった。彼らが現れた五月から普通の青春が始まった。しかし、その青い風は、六月のある日に疾風変わった。

そう、六月二十八日。

私がそれを知ったのは次の日の午後だった。たまたま体が空いたので、イーサンを連れて公園へぶらぶら遊びに出かけた。友達にアイスクリームでも奢ってやろうと思ったのだ。

美しい夏の日だった。あの四人の恋人の物語に出てくるアテネの夏のように。だから緑麗しいこのアメリカで、ヨーロッパで起こった黒い竜巻を予感することなどできなかつた。

公園につくと、何だかいつもより人が多い気がした。人々を辿っていくと、すぐにアレックが見つかった。彼は人々に囲まれ

たベンチの上に立ち、新聞で一杯の肩掛けカバンを下げて「号外！ 号外！」と叫んでいた。

「ヤバいぞ、ヤバいぞ！ サラエボで大事件発生！ オーストリアハンガリー皇太子フランツ・フェルディナンド及び皇太子妃ゾフィー、青年ボスニアの銃弾に倒れたり！ 詳細は紙面にて！ さあ買った買った！」

アレックの声に呼応されるように、人々がポケットから紙幣を出した。私とイーサンがぼかんとしているうちに、彼は新聞を売り尽くし、お立ち台の傍にはいつの間にかアレックと私とイーサン、そして前もって到着していたパトリックとジョンだけが残っていた。

「なんだったん、あれ」

と、私が聞くとアレックは疲れた喉をイチゴ味のアイスで癒しながら一部だけ取り抜いた新聞を差し出した。

「マジで書いてある通り。ハプスブルク家の王子様が無職の不良にぶつ殺された」

「その言い方は違うんじゃない？ 悪いの

はやっぱオーストリアの方じゃん。これは当然の報いだと思うけど」

「どっちがいいとか悪いとか、別に僕らが決めることじゃないでしょ」

アレックの言葉に、ジョンとパトリックがすかさず口をはさんだ。アレックとジョンの類は、国家レベルの暗殺という大事件の前に紅潮していた。しかし、弾む息の中、イーサンは一人だけ首を傾げた。

「何、セルビアって」

「知らないの、イーサン」

パトリックが優しくイーサンの髪を撫でた。彼は特にイーサンを可愛がっていた。「東ヨーロッパにある小っちゃな国の名前だよ。長いことオーストリアに併合されてたんだ」

「国なんだ」

イーサンは華奢な顎に指を添わせて続けた。

「じゃあ、そのフランツ何とかさんはいじめたてた仕返しで殺されたの」

「まあ、平たく言うと」

「仕返しって！ かわいい言い方するな、

こいつ！」

「でも割と事実でしょ」

「確かにそうだけども！ でもいじめてた仕返しって！」

「ねえ、笑うなって！ イーサンはこういう所がかわいいの！」

アレック、ジョン、パトリックがイーサンの幼い物言いにどっと笑った。私もくすくす笑い声を立てた。

「ご家族は」

イーサンが静かに言った。あれだけ大きな声で笑っていても聞き取れる声だった。

「この人にご家族はいたの」

「えっと、確か」

ジョンが首を捻った。

「叔父さんのフランツ・ヨーゼフ皇帝が。」

後は奥さんとの間のお子さん達かな」

「そう」

イーサンが臉を閉じた。

「子供がいたの」

サラエボ事件は、一度国中を湧き立たせ

た後一週間ほどでしおしおと収まっていた。まあ、所詮そんなものである。私だつて同じように事件のことなどころつと忘れてだらだらと暑い日を過ごし、あちこちのパーティーに顔を出して夜には仕事と勉強、日曜には友人達と玉突きなどして遊んだ。別に自分に関係ないことはどうだつていいのだ。誰だつてそう思っていたはずだ。ところが、この頃の私の読みは完璧に外れていた。サラエボ事件は関係なくなくなかった。あの事件から多くのことが私の周りで変わってしまった。

七月二十八日の朝、書齋でコーヒーを飲みながらジェフエリーからくすねてきた新聞を開いた。そして大見出しを五度見し、中の記事を三度読んで、私は口に含んだコーヒーを霧状に噴出させた。

大急ぎでイーサンを引っ張って公園へすっ飛んでいくと、アレックがいつもの三倍の量はある新聞を目を回しながら売捌いていた。ジョンとパトリックも彼を手伝つてあくせくと動いていた。

「あー、もうダメ。死んだわ、俺」

と、何とか新聞を完売させたアレックが息を切らしながらへたり込むと、私は彼に先ほど買った冷たいレモネードの瓶を差し出した。

「始まったんだね？」

と、一言だけ言った。

「ああ」

アレックが瓶から唇を放して言った。いつもは桃色の唇が、あの日は変に赤く肉感的だった。

一九一四年、七月二十八日、世界大戦の幕開けだった。

年若い五人の青年達の間、緊張とその下にある激しい血の脈打つ音が流れた。私は、母を亡くし、床に暮らし、体を売り、何もかも汚しながら上へと昇り続けた日々突然降りかかってきた世界に、驚きと恐れと、名前の付けられない思いに体中をたぎらせた。

「どんな戦争になるかな」

と、アレックが空き瓶の口を指でなぞりながら言った。

「大戦争だよ。ねえ、俺達戦争に行ける

かな。馬に乗って剣を持ってき、どどどど
ーって大群に突っ込んでく、あれがやれ
るかもしれないってことでしょ？」

「それ！ マジでいいよなあ！」

ジョンがアレックに便乗した。

「ああー、ヤバイ！ 俺将来軍人になるの
が夢だったんだよね！ このままアメリ
カも参戦すれば、俺夢がかなうんだだけ
だな！」

「いや、参戦するのかな」

二人の熱に突然バトリックが水をかけ
た。彼は不安そうな色を眼鏡の奥に宿して
いた。

「メインはヨーロッパとその植民地だと
思うけど。だってアメリカが参戦するメリ
ットとかないじゃん」

「ええー……マジ？」

「マジ」

二人の顔が曇り、やがて深いため息が漏
れ出た。彼らのため息で、私の体までひん
やりとした風に当てられた。

「結局関係ないことか……」

アレックの一言が心に冷たかった。自分

に降りかかった世界というものが急激に
遠のき、遙かな宇宙でキラキラと点滅する
のを感じた。

「そうだ、どうせ俺には関係ない。」

そう胸中に呟くと、上等なスーツを着た
私の体がゴミと垢にまみれた子供時代の
体に戻った気がした。

私と同じように項垂れるアレックの隣
に腰掛け、先ほどから一言も発しないイー
サンを片腕で抱き寄せた。

「軍人になりたかったな」

呟いたのはアレックだった。

「戦争に行けば工場労働者の倅の俺でも
国の英雄になれたかもしれないのに。クソ
ツタレ。外国の学生がきゃあきゃあ言われ
てる中、俺は新聞を売り続けなきゃいけない
なんてさ。参戦しないで得するのなんて
商人ばっかしだし」

アレックが五歳児のような顔を苦悩の
ものへと変えていた。私はイーサンを抱き
しめていた腕をアレックの方へ回した。元
気を出せ、そう伝えたくて彼の体をゆさゆ
さ上下に揺すった。

私の方でも残念だった。別にアレックの
ように兵士になりたい訳ではなかったが、
私がたまたまアメリカ人だったという命
運だけで世界から弾き出されたのだ、と思
うと、ストリートチルドレンからここまで
の地位に昇りつめたこの私でもまだまだ
ちっぽけな存在だ、と笑われている気がし
た。

そんな悔しい思いをしながら、先ほどの
アレックの言葉を口の中に戻して強く噛
み締めた。

すると、一つ気にかかる言葉にふと気づ
いた。

参戦しないで得するのなんて商人ばっ
かしだし。

アレックの肩を抱く手にぐつと力がこ
もった。青い目がぐんぐん張り詰め、眉が
勢いよく跳ね上がった。友人達が私の表情
の変わりように驚いた顔をした。

「そうだ。参戦しなくても商人は得をする
じゃないか。」

アレックを話して立ち上がった。そのま
ま二、三步ふらふら歩いた。

リズリーは確か武器を作ってマファイアに売る商売をしてたよな。ミシガン湖からどっさり鉄が取れるからそれを使って。そうだ！ その武器をアメリカのマファイアじゃなくて列強に売ったらいいんだ！ うちの中立国だから敵味方関係なく売れるぞ！ そうなりや大儲けだ！ やった！ ロバート、これってすごいぞ！ 悪党の愛妾の俺がこの戦争に一役買えるかもしれない！ とうとう成功者になれるんだ！

「やったあ！ やるぞ！」

私は歓喜のあまり絶叫した。イーサンと三人の友人が呆気にとられた顔で私を見たが、私は構わずアレックを抱きしめ頬ずりした。

「ありがとう！ アレック！ 君のおかげだ！」

そしてイーサンの手を引いて公園を駆け出て行った。新聞を手にぎわめく人々の林を勢いよく駆け抜けた。私の足は今までのないほどの駿足で、貴婦人のドレスの裾が吹き上がるほどだった。

やってやる！ やり遂げて見せる！

喜びのあまりついイーサンの手を強く引いた。彼が呻く声も聞こえず、私は一度しぼんだ熱を体中に燃え立たせ、若さにながりに、ただ明るいと思える方向に走っていた。

アン！ 俺は何かになれる！ これだよ！ やく誰からも哀れみを向けられないすごい人になれる！ 惨めでも醜い存在でもなくなるんだ！ そしたらきつと君の前で胸を張れる！ ようやく好きになつてもらえる！ ようやく、ようやく何かを手に入れられる！

ビルにつくとエレベーターも使わずに階段を駆け上って五階にあるリズリー氏の仕事部屋に駆け込んだ。後ろにいるイーサンがひいひい言うのも構わず、私は書き物机に向かうリズリー氏に突進した。

「旦那様！」

と、叫んで机を思いきり叩いた。積み上げられた紙束や鉛筆や万年筆が、卓からバラバラと落ちた。

「なんだ、なんの用だ！」

と、リズリー氏は目を丸くして叫んだ。が、私は負けじと掴みかからん勢いで捲き立てた。

「旦那様！ 大変です、戦争です！ 世界戦争が始まりますよ！」

「ああ、そうだ戦争だ！ だがうちは参戦せん！ どうせよそ様のごたごただ！」

「だからですよ！ だからこそできることがありますよ！」

わあわあ開閉する私のやかましい口を、リズリー氏が煩わしそうに片手で制した。

「分かった、分かった。頼むから落ち着いて順番に話してくれ」

私は大急ぎで息を吸うと、頬を桃色に染めて喋り立てた。

「旦那様！ 戦争には武器がいります！ うちがマファイア相手に葉や鉄やら武器やらを売ってるでしょう？ それをマファイアじゃなくて欧州に売らんです！ 戦争となりやあっちも非常事態だからすぐこつちを頼りだしますよ！ ね、やりましょうよ旦那様！ 儲けはどんどん上がりますよ！ これは千載一遇のチャンス

です！」

「ロバート」

はっとして見ると、自分の熱弁とは裏腹に、リズリー氏はげんなりとした表情で右手を眉間に当てていた。

「そのくらい、お前が考えんでも分かる。そういう手もあると思ったが、しかしな、うちはそんな対外的な取り組みはせんていい。内輪のことで十分稼げるのなら、わざわざそんな危険な賭けをせんでも……」

「でしたら！」

私は興奮のあまりさらに身を乗り出した。

「外交の役は私にお任せください！ 今までずっとビジネスや語学の勉強を積んできましたから、きつと上手くできます！ このビルの金庫を破裂させて見せます！ ね、ですから私に任せてくださいよ！」

「ロバート、ロバート」

リズリー氏が私を遮った。その「ロバート、ロバート」を聞いた時、ふと嫌な予感がした。二回目の「ロバート」にあからさまな軽蔑が含まれていたのだ。

案の定だった。リズリー氏はチョコレートを欲しがって無く五歳児を相手にする

ような顔で、机に置かれた私の手を執拗に撫でさすった。

「ロバートや。何をそんなに恥ずかしいことを言い散らして。道で寝起きしてゴミを漁っていたお前にそんな御大層なことできるもんかね。お前は言われた通り自分の手入れのことだけ考えておればいい。あのマクファアーレンの生意気娘のようになられちゃ困るんだよ」

彼は笑いながら立ち上がり、私の下肢に軽く触れてから部屋のドアに向かった。ドアを開けて出ていく間際、わきの壁にもたれていたイーサンの腰にも彼の手が伸びた。

扉が閉まる乾いた音が消えいらぬうちに、私の拳は机の上に叩きつけられた。卓上のインク壺が飛び上がって床を汚した。

「畜生！」

思いつきり吐き捨てた。無銭で買われたときと同じ怒りがむらむらと沸き上がった。

た。

畜生、畜生！ 俺にはできないってか！ 無理だっけか！ どうせ俺は汚ねえ顔だけの成り上がりだっけか！ クソつたれ！ どいつもこいつも俺を見下しやがって！

歯をぎりぎり噛み合わせながら何度も机を殴りつけていると、上下に暴れる私の肩にふと柔らかいものが添えられた。

見ると、銃を握り続けたおかげで指先の皮膚の固まったイーサンの手だった。彼は心配そうな顔で私を見、「大丈夫？」と言優しく言った。

「うっせえ！ 放つとけ！」

「うっせえ！ 放つとけ！」

と、怒鳴ってイーサンの手を叩き退けた。空中に跳ね除けられた右手をそのままにして、イーサンは固まった。その薄黒い瞳に透き通った膜が張るのを見て、私ははつとした。

しまった！

私は大急ぎで彼の体を抱きしめた。後悔

の念がどっと押し寄せ、自分が怖くなった。「ごめん、イーサン。ごめん。あんなことしてどうかしてた。ごめんよ」

揺り籠のように体を揺らすと、イーサンの体はふっと緩んだ。近くで見ると一層大人びて見える顔を微笑ませて、イーサンは優しく笑った。

「心配しないで。大丈夫だから」

暑い日がだらだらと続いた。アレックの売る新聞には戦火が赤々と燃え盛っていた。戦争に行きたいのに行けないアレックとジョン、成功したいのにできない私は紙の上で見せびらかされる勇ましい戦記に心をかき乱されていた。神学生であるパトリックさえ戦争のことを口にした。イーサンだけが黙り通しだった。そんな日々の苛立ちから逃れるように私達五人はアイスクリームを食べ、自転車を乗り回し、バスケットボールに興じた。

リズリー氏はあれからさらに露骨に私を見下すようになった。真昼間であっても

卑猥な話を吹っ掛け、ちよつとしたミスをねちねちいつまでも責めた。

私は彼の前で二度とビジネスの話はしなかった。いくら話しても無駄だと思った。しかし単純に何でもはいはいと言うことを聞くのは癪だったから、勉強だけはがむしゃらに続けた。

成功への道筋の最初の一步に片足だけ踏み出しているような、心地の悪い思いを苦く味わった。何をすべきなのかさえ分からなかった。ただ苛立ちを募らせるつまらない日々だけが続いた。あの日……あの日までは……うう、嫌だ、思い出したくない……気持ち悪い……吐き気がする……。

すまない、大丈夫だ。吐いたらすっきりしたよ。大丈夫、ちゃんと話す。

すべての苛立ちを断ち切って本当にトップになる血まみれの道を進むことを決意した日がある。夏だった。

ある日の午前、リズリー氏の部屋で手紙の返信を手伝っていると、彼がポツリと呟

いた。

「お前、イーサンも中々の美少年だと思わないか」

私は熱した蝉を封筒の上に注ぐことに集中していたので、彼の言ったことをよく聞いておらず「はあ」と気の抜けた返事だけ一つした。

「そうだろうな。あの子はモテるのか？如何にも女受けしそうな顔だが」

「さあ、どうなんでしょう」

「恋人はいたのか？」

「いないんじゃないですか」

面倒くさそうな私の返事にリズリー氏が声を出して笑った。

その日の午後、私はジョンからの預かりものを渡そうとイーサンの元へ向かった。彼は午後を訓練場、次に台所という順番で過ごす。この時間帯なら台所だろうと思つて調理場の扉を開けた。

調理場にはキッチンメイドの娘が三人とミリーがいて、お茶の準備にあくせくと動いていた。イーサンの姿はない。私は彼女らに声をかけた。

「ねえ、イーサン来てないの？」

「ここには一度も顔出してないわよ」

ミリーが答えた。

「訓練が終わったからケーキを焼くのを手伝うって言ってたから待ってるんだけど、全然来ないのよ。多分あいつ忘れてるわね。部屋にいると思うから、あんた行って呼んできてよ」

「はあ、さいですか」

私は礼を言っただけで調理場を出ようとした。すると別の娘がポツリと言った。

「そういえばさっき旦那様がイーサンの部屋へ向かってくのを見たわ。仕事の相談でもしてるのかしら」

リズリー氏がイーサンに何の話があるのか気になったが、私はひとまず調理場を後にした。

イーサンは結局自分の部屋にいた。リズリー氏の姿は見えなかった。

「あ、ロバート」

と、彼は寝台の上に腰掛けたまま私を見上げた。手にはいつものように縫いかけのパッチワークと長針がある。

「ここにいたのか、イーサン。お前ミリーとの約束ドタキャンしただろ」

「あ、やば、忘れてた。後でミリーには謝っとくよ」

私はジョンから預かった雑誌を机の上に置いた。その時、靴のつま先に何かがつんと当たった。

屈んでみると、イーサンのネクタイ留めが床の上に無造作に転がっていた。端に牡鹿の飾りのあるそのネクタイ留めは、イーサンの十三歳の誕生日に私がプレゼントしたもので、昼も夜も毎日イーサンの棟もちで光っていた。私は体中の血液が凍り付いていくのを感じた。几帳面なイーサンは小物などを必ず箱に入れて保管する。こんな風に床へ放り出したりは決してしない。震える手で拾い上げると、銀メッキが所々欠けていた。まるで乱暴に弾き飛ばされたかのように。

私は勢いよく振り返ってイーサンに歩み寄った。彼のネクタイはぐちゃぐちゃに絡まり、ジャケットは皺が寄り、シャツのボタンはかけ違えられている。パッチワー

クを握る手がぶるぶると震えている。

イーサンは素早く私の腰に抱き着いた。そして大声で泣き出した。

「やめてって言ったんだ！」

血を吐くような声で彼は叫んだ。

「旦那様が部屋に来たんだ！ それで、それで気持ち悪いことを！ 俺、嫌だって言ったのに！ 何回も何回も嫌だ、やめてくださいって言ったのに！」

かける言葉が見つからなかった。泣き叫ぶイーサンを抱きしめ、茫然と虚空を見つめた。

俺のイーサン。俺のかわいいイーサン。ほんの昔にこの子は赤ちゃんだった。今だって十五にもならない子供。アイスクリームと自転車とかわい小さい小物が似合う子。この子がついさつき、俺が味わったみじめで情けない思いを知ってしまった。無理矢理に。

虚無が愛へと変わると、次は体が動いた。強く彼を抱き、頬や額に何度もキスした。唇の動きごとに、愛が怒りへと変わった。守ってやれなかった。あの時、ちゃんと

リズリーの話を聞いていけばこんなことにはならなかった。少し賢くなって油断していた。俺達はどこではまだまだ底辺なんだ。少し隙を見せるとあつという間に食いつぶされる、そんな存在だということを忘れていたのだ。美しい服や贅沢な毎日に乗っかってきた。所詮俺は地面に這いつくばるガキだった。

急がなければ。

そんな言葉が脳裏を掠めると、全身の血が煮えたぎった。

もうぐずぐずしてはいられない。必ずトツプにならなくては。これ以上、俺の大事なものを汚されてたまるものか。もう手段は択ばない。どんなことだってやる。そうだ、トツプになるために一番近い道がある。

ほかに道があったと言いたいのか？ 私に他の道が残されていたのか？ 例えばどんな？ 分からないならなぜそんなに怒っている？

そうだな、うん、俺が悪いな。俺が間違ってた。そうだな。でももうあの子はここにはいない。もう二度と会えない。謝れない。ああ、だから話したくなかったんだ。感情が押し寄せてくる。自分が分からなくなる。イーサン。俺の子供達。ごめんなさい……。ごめんなさい……。ごめん……。ごめんね……。

(続く)

リズリーを殺す。必ず殺してやる。